明治宮殿の設計内容に見る儀礼空間の意匠的特徴

THE CHARACTERISTICS IN THE DESIGN MEANINGS
OF THE MEIJI PALACE'S CEREMONIAL SECTION

山崎 鯛介*

Taisuke YAMAZAKI

This paper shows that in the ceremonial section of the *Meiji Palace*, the grandiose interior was designed in relation to its use. The public part of the *Meiji Palace* was clearly divided into the ceremonial section and the daily-work section by means of building planning and interior design. In the ceremonial section, the ornaments were designed selecting the motifs and the colours to show the image of each ceremony (the audience and the party). The patterns of ornaments were derived from the ancient treasures in Japan, and the most of the ornaments were manufactured applying modern techniques.

Keywords : *Meiji Palace, Modern Japanese-style, interior design*

明治宮殿、近代和風、室内意匠

1. 緒言

近代の宮殿として建設された明治宮殿（正式には「宮城」）の意匠的特徴については、これまで『明治工業史 建築篇』（工学会、昭和2年）を始めとする日本近代建築の通史を扱った著作¹⁾において、主に謁見所や饗宴所などの建物を取り上げられ、その内部空間に見られる立式対応、大空間、和洋折衷といった特徴が写真とともに紹介されてきた。また、宮内庁所蔵史料を用いた小野木重勝博士の研究論文『近代和風宮廷建築における和洋折衷技法に関する研究』（昭和62年度科学研究費補助金〔一般研究C〕研究成果報告書）では、宮殿全体の建物を対象にそこで用いられた意匠や技法の特徴が詳細に検討され、その結果、奥宮殿には絨毯や暖炉などの洋風要素が見られるものの全体的には伝統的な意匠・技法が用いられたのに対し、表宮殿にはそれらとともに室内装飾や構造技術にも洋風要素が積極的に導入されていたことが明らかにされた²⁾。このように、明治宮殿の意匠的特徴については、これまで「表宮殿」と「奥宮殿」とを対比的に捉える図式の中で多くのことが明らかにされてきたといえる。

しかし、明治以降の天皇には、古代以来の皇位を継承する伝統的な存在であることと共に、西洋諸国をモデルに近代化を推進する近代国家の君主としての役割も求められたため、表宮殿における活動には国家政務の裁可や外国公使の謁見、皇室外交を目的とした宮中儀礼な

ど、それまでとは異なる新しい内容が取り入れられ、それはまた、天皇のそうした多様な活動の場となる明治宮殿にどのような建築的形式を与えるべきか、また「伝統的」でありながら「近代的」でもある天皇の二面性にどのような意匠表現を与えるべきかといった問題として、宮殿の設計内容にも深く関わってきたと考えられる。こうした「近代の宮殿」に求められた複雑な要求が竣工した明治宮殿の設計内容にどのような形で示されたか具体的に理解しようとするとき、表宮殿の設計経緯や設計内容については、まだ十分に明らかにされていない点が多く、また従来の「表宮殿」と「奥宮殿」を対比的に捉える図式では、建物の具体的な特徴が把握しきれないと考えられる。

そうした認識から、拙稿「明治宮殿の建設経緯に見る表宮殿の設計経緯」（『日本建築学会計画系論文集』、第572号、pp.159～166）では、表宮殿の特徴として知られる大空間・和洋折衷の内部空間について、まずその成立過程を解明することを目的とし、既往研究でほとんど取り上げられることのなかった明治16年7月以降の建設経緯について、明治宮殿の竣工記録である『皇居御造営誌』（内匠寮、明治25年）に加え、皇居造営に関する公文書である『皇居造営録』（皇居御造営事務局、明治9年～23年）や東京都立中央図書館木子文庫所収の明治宮殿関係史料などを用いて、工事過程で加えられた設計変更の内容について詳細に検討した。その結果、表宮殿の特徴として知られ

* 東京工業大学大学院理工学研究科 助手・工修

Research Assistant, Dept. of Architecture, Graduate School of Science and Engineering, Tokyo Institute of Technology, M. Eng.

る大空間・和洋折衷の内部空間は着工当初には決定しておらず、工事と並行して行われた設計変更の際に決められたことを明らかにし、また壁面に用いられた洋風意匠については、西洋風の宮中夜会を想定して導入された可能性が高いことを家具計画書の内容から明らかにした。そして、設計変更の時期と宮内卿として皇居造営事業に強い権限を持っていた伊藤博文の就任期間がほぼ一致することや、装飾化・洋風化を意図した設計変更の内容と西洋風の宮中夜会の開催を重視した伊藤の宮中政策とが一致することから、こうした表宮殿の壮麗化には、条約改正問題を背景に皇室外交を推進した伊藤博文ら新政府の意向が強く働いていた可能性が高いことを論じた。

つづく本研究では、同じく明治宮殿の表宮殿に見られる壮麗な内部空間について取り上げ、その竣工時の意匠を詳細に検討するとともにそれらを表宮殿全体の平面計画と併せて検討することで、そうした意匠的特徴が「近代の宮殿」に対する複雑な要求とどのように関係づけられ、また何を表現したものであったかについて考察した。従来の研究では平面計画についての検討が不足していたため、明治宮殿の特徴は謁見所や饗宴所など建築単体の特徴として論じられるに留まることが多かったが、本研究では平面計画を重視することによって、まず「宮殿」としての全体構成を理解し、その上に個々の建物の意匠的特徴を位置づけ直すことを試みた。

既往研究には、表宮殿の意匠的特徴について、それを宮殿の全体計画の中に位置づけて理解しようとしたものは見られない。宮殿全体を扱った小野木重勝『近代和風宮廷建築における和洋折衷技法に関する研究』(先掲)においても、建物の室内意匠については表宮殿と奥宮殿の比較に留まり、それぞれの建物の具体的特徴が全体計画の中でどのように位置づけられたかについては、あまり触れられていない。

史料として、明治宮殿の竣工時の様子については、宮内庁書陵部所蔵の『皇居御造営誌』(先掲)および『皇居御造営内部諸装飾明細図』(内匠寮、明治25年)を用いて明らかにした。また、建設過程の設計内容については、皇居造営の公文書である『皇居造営録』(先掲)や東京都立中央図書館木子文庫所収の明治宮殿関係史料などを用いて明

らかにした。なお、明治宮殿の各建物の名称については、竣工後の明治21年12月27日に正式名称が宮内省から布達され、たとえば造営中に「謁見所」と呼ばれていた建物は「正殿」へ、「御学問所」と呼ばれていた部屋は「表御座所」へと改称されたが、本研究では、設計過程の設計図書や公文書を扱う関係上、建物の名称には「謁見所」など造営中の名称を用いることとした。

図1.「第貳区御建物床違色分之図」(部分、明治18年4月8日、木子文庫所収)

2. 表宮殿の平面計画・意匠計画に見られるゾーニング

天皇の公務の場である表宮殿には、日常政務を執る場所と宮中儀礼を行う場所の両方が必要とされたが、それぞれの施設では必要とされる規模も使用頻度も異なることから、これらを適切にゾーニングすることは平面計画上の重要な課題であったと考えられる。本章では、宮殿全体の配置計画が高低差のある西之丸・山里の敷地においてどのように行われたかをまず明らかにし、その上で表宮殿に見られるこれら2種類の用途がどのようにゾーニングされたかについて論じた。

明治宮殿が建設された西之丸と山里の境界部分について、『皇居御造営誌』には、「山里ト旧西丸ノ地形高低凡二十余尺ニ及フヲ以テ建物ノ接続処尽ク段階ヲ設ケサル可カラサルノ不便ナル事」³⁾と、最大20尺以上に及ぶ高低差があったことが記されている。この境界部分について江戸末期の江戸城西之丸御殿の平面図⁴⁾を見ると、ほとんどは石垣ではなく「銅塀」で区画されており、この時点では両者がそれほど明確に区画されていなかったことがわかる。敷地の造成工事については、『皇居御造営誌・工程表』(以下『工程表』)所収「第四区負担築造期限工程進歩一覽表」に、地鎮祭直後の明治17年6月から12月にかけて「山里地違石垣」の工事が実施されたと記されていることから、西之丸と山里はこの石垣の設置によって初めて高低差のある2つの敷地として明確に区画されたと考えられる。

この石垣の形状については、『皇居造営録』所収の石垣の仕様書⁵⁾に「中段地盤上端ヨリ地山迄九尺五寸」(下線部筆者、以下同じ)と記されており、また同史料所収の概算書⁶⁾に「武重石垣長延百貳拾九間五分」と記されていることから、山里と西之丸との間に「中段」

表宮殿			奥宮殿	
1. 謁見所	9. 西化粧の間	17. 向(北の間)	24. 聖上常御殿	
2. 饗宴所	10. 東脱帽所	18. 御学問所	25. 皇后宮常御殿	
3. 後席の間(広間)	11. 西脱帽所	19. 侍從詰所	26. 皇太后宮御休所	
4. 同(婦人の間)	12. 北溜の間	20. 侍從武官詰所	27. 宮御殿	
5. 同(小食所)	13. 南溜の間	21. 皇族・大臣候所	28. 御臺代	
6. 東溜の間	14. 御車寄受付の間	22. 附立所	29. 女官面謁所	
7. 西溜の間	15. 東車寄受付の間	23. 大膳職	30. 奥御車寄	
8. 東化粧の間	16. 内謁見所(広間)			

図2. 明治宮殿竣工平面図(網掛け部分は「中段」の位置を示す)

を設けた「貳重石垣」なるものであったことが知られる。この「貳重石垣」の位置と「中段」の範囲について『皇居造営録』所収の山里の二重石垣の配置図⁷⁾を見ると、「中段」は西之丸の西側部分全体を占めており、また石垣の高低差については、造成後の様子を示すと考えられる木子文庫所収の敷地断面図「第貳区御建物床違色分之分図」(図1)⁸⁾に、山里と「中段」の高低差が12尺、「中段」と西之丸の下段(以下「下段」)の高低差が2尺として描かれていることから、宮殿の敷地は、この「貳重石垣」の設置によって南北方向に細長い高さの異なる3つの領域、すなわち上段(山里)、「中段」、「下段」へと分割されたと考えられる。

こうした地盤の高低差を含めて作成した明治宮殿の竣工平面図⁹⁾を図2に示す。表宮殿の平面計画について図2を見ると、東側の「下段」には主に1室大空間を持つ大規模建物が回廊に囲まれる形で建設されたのに対し、西側の「中段」には小規模な建物が数多く建てられたことがわかる。こうした規模の違いは建物の床高さにも直接関係するが、建物の床高について『皇居御造営誌』を見ると、「中段」に建設された皇族・大臣候所、侍従・侍従武官詰所などの小規模建物はいずれも地盤から3.04尺であるのに対し、「下段」に建設された饗宴所、後席之間などの大規模建物については地盤から5.04尺とされており、両者は石垣の段差2尺を含むことで床高がほぼ等しくなるように設定されたと考えられる。

これら表宮殿の建物の用途については、図2に示した建設中の建物名称がそのまま計画段階で想定された建物の主な用途を示すと考えられるが、これによると、東側「下段」の大規模建物は、御車寄、謁見所、饗宴所、後席之間、東西溜之間など、宮中儀礼の際に使用する建物として計画されたことが知られ、それに対し、西側「中段」の小規模建物は、天皇が日常的に政務を執る御学問所、天皇が臣下や外国公使との内謁見を行う内謁見所、天皇の日常政務を補佐する侍従・侍従武官詰所などとして計画されたことがわかる。これらのことから、表宮殿の平面計画では、石垣の段差を利用する形で、「下段」=「宮中儀礼の場」、および「中段」=「日常政務の場」として両者がゾーニングされたと見ることができる。

次に、こうした平面計画上のゾーニングを踏まえて、表宮殿における室内意匠の用い方について検討した。表1には、入側を持つ表宮殿の独立建物を主要建物として取り上げ、それらの室内意匠について、『皇居御造営誌』の記載からわかるものをまとめた。表1では、室内意匠を床仕上・壁面・天井の3つの部位に分類し、そのうち壁面については、さらに入側建具や腰羽目などの要素に細分類した。まず、和洋折衷として知られる表宮殿の室内意匠において和洋要素がどのような形で折衷されたかを見るため、表1に示した室内意匠の要素を大きく「和」と「洋」に分類した。和と洋の分類基準は、伝統的な和風建

築に用いられてきた要素を「和」とし、当時の西洋建築に用いられた要素を「洋」とした。すなわち、暖炉については、前飾りのデザインに関わらず設けられたものはすべて「洋」とし、床仕上げについては畳敷きを「和」とし、絨毯敷き・寄木張りは下地に関わらず「洋」とした。壁張付については紙張付を「和」とし、織物張付を「洋」とした。入側建具については明障子を「和」とし、ガラス開き扉を「洋」とした。軸組については大壁を意図的に「洋」を表現したものと見なし、緞帳と腰壁については、建物の規模に左右される可能性が高いことから和洋分類の主要な対象とはせず、参考として表に示した。

表1から、床仕上げや暖房設備など、立式の採用に伴って必要とされる洋風要素については表宮殿全体に導入されたことがわかる。一方、そうした立式の導入とは直接関わらない壁張付について見ると、「下段」の儀礼空間には洋風の織物張付が用いられたのに対し、「中段」の御学問所・内謁見所には和風の金砂子蒔張付が用いられており、両者では壁仕上げの素材が区別されたことがわかる。そして、天井意匠については、すべてに和風意匠が用いられた。

このうち、壁面と天井に用いられた和風要素の意匠的特徴について見ると、御学問所と内謁見所の壁面に用いられた「金砂子蒔」と天井の「(二重)折上小組格天井」は、奥宮殿の聖上常御殿と同様の意匠形式であったことがわかる。それに対し、儀礼空間の天井には装飾的な漆塗りの極彩色張付天井が用いられており、両者は和風意匠の用い方においても明確に区別されたと見ることができる。

入側建具については、「下段」の儀礼空間に洋風のガラス開き扉(『皇居御造営誌』には「腰付硝子開」と記載)が適用されたのに対し、「中段」の御学問所・内謁見所には、材料に「紅花欄」(内謁見所)や「櫻」(御学問所)などの唐木(風)材を用い、框の入隅に丸面を取った中国風と考えられる意匠の引違い建具「腰付中硝子障子」が適用された(図3)。儀礼空間に用いられた洋風のガラス開き扉については、拙稿「明治宮殿の建設経緯に見る表宮殿の設計経緯」(先掲)で、『皇居造営録』所収の建具仕様書の日付から、その意匠が明治20年2月～4月頃に洋風に決定され、また『工事録』から明治20年2月～4月に入側の柱や鴨居・方立に対し、「唐戸面取」を施すなど軸部を洋風の建具枠に見立てた変更が加えられたことを述べた(p.164)が、それに対し、例えば御学問所の入側建具については、明治19年には和風の腰付ガラス障子で計画されて

図3. 内謁見所入側建具(『皇居御造営内部諸装飾明細図』より)

表1. 明治宮殿の主要建物に用いられた室内意匠の要素(『皇居御造営誌』を基に作成)

領域	建物名(室名)	暖炉(前飾)	床		入側建具	壁面				軸組	天井
			仕上(下地)	「靴摺」		床飾	壁張付の素材	緞帳	腰羽目		
下段	東溜之間	蒸気・空気暖房	寄木張	靴摺	漆塗ガラス唐戸	無	緞子張	有	有	廻縁長押(大壁)	折上格天井漆塗・極彩色張付
	西溜之間	蒸気・空気暖房	寄木張	靴摺	漆塗ガラス唐戸	無	緞子張	有	有	廻縁長押(大壁)	折上格天井漆塗・極彩色張付
	謁見所	蒸気・空気暖房	寄木張	靴摺	漆塗ガラス唐戸	無	襦子張	有	有	内法・有壁・廻縁長押	二重折上格天井漆塗・極彩色張付
	饗宴所	蒸気・空気暖房	寄木張	靴摺	漆塗ガラス唐戸	無	緞子張	有	有	内法・有壁・廻縁長押	二重折上格天井漆塗・極彩色張付
	後席之間広間	蒸気・空気暖房	寄木張	靴摺	漆塗ガラス唐戸	無	襦子張	有	有	内法・有壁・廻縁長押	折上格天井漆塗・極彩色張付
中段	南溜之間	暖炉(大理石)	寄木張	靴摺	(入側なし)	無	緞子張	無	無	内法・有壁・廻縁長押	折上格天井漆塗・極彩色張付
	内謁見所	暖炉(大理石)	寄木張	靴摺	唐木ガラス障子	無	金砂子蒔	無	無	内法・有壁・廻縁長押	二重折上小組格天井
	北之間	暖炉(大理石)	寄木張	靴摺	唐木ガラス障子	無	金砂子蒔	無	無	内法・有壁・廻縁長押	折上小組格天井
	御学問所(1階・御学問所)	暖炉(大理石)	絨毯(拭板)	靴摺	唐木ガラス障子	有	金砂子蒔	無	無	内法・有壁・廻縁長押	折上小組格天井
	御学問所(2階・御学問所)	暖炉(大理石)	絨毯(拭板)	靴摺	唐木ガラス障子	有	色烏ノ子	無	無	内法・有壁・廻縁長押	吹寄格天井
上段	聖上常御殿(御小座敷)	暖炉(蒔絵)	絨毯(畳)	畳寄	入子障子(明障子)	有	金砂子蒔	無	無	内法・有壁・廻縁長押	二重折上小組格天井

「洋」← →「和」

いたことが木子文庫所収の史料¹⁰⁾から知られ、実施案に見られるような中国風の引違い建具への変更は、『皇居造営録』所収の仕様書「御学問所及具服之間共建具櫻造製作仕様書」¹¹⁾や「内謁見所及西之間北之間共建具花欄造仕様書」¹²⁾が作成された明治20年5月～6月頃に行われたと考えられる。このように、御学問所・内謁見所への中国風建具の導入は、儀礼空間の入側建具が洋風建具に変更された後に決定されており、このことは「中段」の入側建具に対して意図的に洋風意匠が適用されなかったことを示すと考えられる。

以上のように、表宮殿では平面計画のゾーニングを踏襲する形で、室内意匠の用い方が「中段」の日常政務空間と「下段」の儀礼空間とで明確に区別された。その変更の経緯と内容からは、用途の違いを室内意匠にも反映させるとともに、特に大規模儀礼を行う儀礼空間に対しては、壁面の洋風意匠や極彩色の張付天井など、御所の伝統にはあまり見られない意匠を用いても内部空間を積極的に壮麗化しようとする姿勢を見ることができる。

3 儀礼空間の平面計画に見られる近代的な儀礼形式への配慮

前章では、表宮殿の平面計画や室内意匠が、新設された「貳重石垣」を活用する形で「中段」の日常政務空間と「下段」の儀礼空間の2つの領域にゾーニングされ、中でも明治宮殿の特徴として知られる壮麗な室内意匠については、儀礼空間に限って適用された意匠であったことを明らかにした。本章と次章では、この儀礼空間に絞ってその設計内容を詳細に検討し、儀礼空間の平面計画には近代的な宮中儀礼への配慮がどのような形で示されたか、またその室内意匠には「近代の宮殿」にふさわしい意匠がどのような形で表現されたかについて考察した。本章では、まず儀礼空間の平面計画について詳細に検討し、そこに見られる特徴と近代的な儀礼形式との関係について論じた。

まず、敷地と建物との関係について表宮殿の配置図¹³⁾を見ると、南北に細長い西之丸「下段」の敷地において、儀礼空間の建物は敷地東側と南側に余地を残すように配置されたことがわかる。これは、坂下門と皇居正門からのアプローチを考慮した建物配置であったと考えられるが、このうち御車寄南側の空地については南北方向の奥行きが比較的深く、通過動線とは別の目的で広く確保されたと考えられる。御車寄前の空地の役割については、造営過程で「建物ノ前面ハ過半車馬ノ道敷ト為サルヲ得ス」¹⁴⁾との考え方が示されており、また竣工後の明治23年の新年拝賀の際には、実際に数多くの馬車が皇居内に駐車されたと英国公使夫人の日記¹⁵⁾に記されていることから見て、この空地は宮中儀礼など多くの「車馬」が同時に通行する際に、車廻しや駐車用のスペースとして活用するために設けられたと考えられる。こうした「車馬」への配慮は、宮殿の建設と並行して行われた大手橋(石造橋)・二重橋(鉄造橋)の改修工事にも見ることができ、いずれも橋の中央部分には幅20尺の「車道」が確保され¹⁶⁾、また鉄橋の強度計算においては、「壹呎二付八拾封度即チ四輪車二拾貳噸ノ荷ヲシタル面ニ耐ユルモノトス」¹⁷⁾と、四輪車の重量が想定された。

建物の平面計画については、儀礼空間全体を回廊で囲み、ほとんどの建物が中庭に面して配置されたことが竣工平面図から知られるが、これは、南北に細長い敷地において外部からの視線を遮断し、かつ建物に開放性を与えることを意図したものであったと考えられる。このうち、宮中儀礼の中心施設である謁見所と饗宴所の配置を比較すると、両者は南北方向に縦並びで設けられた2つの中庭に対してそれぞ

れ南面するように配置されており、また共通の控え室である東西溜之間もその中間に配置されたことから、両者はほぼ対等に位置づけられたと見ることができる。しかし、両者の設計内容を詳細に検討すると、特に中庭を共有する建物との配置関係において、それぞれに異なる特徴を見ることができる。

まず、謁見所の設計内容には、他の主要建物と異なる特徴が多く見られ、柱間の基準寸法には表宮殿で唯一1間=7尺(他は全て1間=6.5尺)が用いられた他、平面の形状には比較的正方形に近い形(室内部分で横幅10間×奥行8間=160帖)が唯一適用された。また周囲との関係の取り方には建物単体としての独立した外観を強調する姿勢が見られ、それは東西両隣を坪庭とし、4箇所(の渡り廊下のみで周囲と連結した点や、その上で床高さを儀礼空間の中で最も高く設定した点¹⁸⁾)などに見ることができる。そして、妻飾りの意匠には京都御所(安政内裏)の紫宸殿と同じ「貳重虹梁臺股枅肘木組」(他はすべて木連格子)と「鳳凰」の破風金物(他はすべて「御紋腰折唐草」)が用いられた。謁見所の小屋組はトラスであることから、この妻飾りの意匠は小屋組とは無関係で、「紫宸殿との共通性」という意味において天皇の「権威」を表現したものと考えられる。

謁見所ではこのように単体として「権威」を表現するだけでなく、中庭を共有する御車寄や東西脱帽所との配置構成を工夫することで、アプローチ空間からの眺めを意識した外観の「記念性」も表現されたと考えられる。南正面に位置する御車寄と東西脱帽所の平面形式には、南北軸を中心に左右相称とし、中央部の御車寄と両翼部の東西脱帽所を前方に突き出した記念性の強い三部構成の平面形式が適用されたが、屋根については東西脱帽所が妻を正面に向けたのに対し、中央部の受付の間では棟を東西に向けるなど、両翼に比べて中央部を強調する姿勢がそれほど見られないことがわかる。これは、背後に控える謁見所の大屋根への見通しを確保し、両翼に強調された東西脱帽所の屋根と中央部に遠望される謁見所の大屋根による三部構成によって外観の「記念性」を表現するためであったと考えられ(図4)、それは、謁見所前庭の奥行きが13.35間¹⁹⁾と饗宴所前庭の31.5間と比べて極めて浅いことや、謁見所の立面を真正面に眺めるための窓が御車寄「受付の間」の北壁面に設けられていない点などに窺える。

一方、饗宴所の設計内容には独自性や記念性を協調する姿勢は見られず、平面形式には中庭を共有する後席之間や東西溜之間とほぼ同じ比率の横長平面を採用するなど、むしろ共通の特徴を見ることができる。そして、これら中庭を共有する建物に見られる特徴としては、大規模儀礼の際に必要なとされる溜之間が、この中庭に面して数多く配置された点が特に注目される。すなわち、竣工建物では東西溜之間(各175.5帖)の他に、南溜之間(70帖)と北溜之間(60帖)が設けられ、そのうち北溜之間を除く3室はいずれもこの中庭に面して配置されたが、これを謁見所前の中庭と比較するとその違いは顕著で、謁見所前

図4. 明治宮殿御車寄外観写真(上野竹次郎編『鳳闕』大正14年より)

の中庭に面する控室には、東西脱帽所(31帖～42帖)や化粧之間(各15帖)など、小規模の控室しか設けられていないことがわかる。

こうした儀礼空間の建物配置について、拙稿「明治宮殿の建設経緯に見る表宮殿の設計経緯」(先掲)では、地鎮祭前後の明治17年4月頃から木工事着手直前の明治18年8月にかけて、主要建物の配置には大きな変化が見られないことを述べた(p.162)が、この間の個々の建物の設計過程を詳細に検討すると、先に述べた謁見所や饗宴所に見られる特徴が、この着工延期の期間に設計変更を繰り返しながら確定して行った過程を知ることができる。例えば、謁見所の平面について、『皇居造営録・御車寄』所収「御車寄謁見所其外御間内模様同件」附図(明治17年4月16日)を見ると、ここでは柱間の基準寸法に1間=6.5尺が用いられた他、平面は8間×8間(128帖)の正方形平面で両隣には「謁見所東西之間」(各81帖)が計画されており、ほぼ同時期の木子文庫所収の床高比較図²⁰⁾では、謁見所と両隣の建物の床高が饗宴所・後席之間よりも2尺低く設定されるなど、この時点では竣工建物のような独立性がまだそれほど強調されていなかったことがわかる。また御車寄との関係について見ると、謁見所前の中庭の奥行きは、宮内庁所蔵「宮殿内間取図」(明治17年4月頃、図5)²¹⁾

図5. 宮内庁所蔵「宮殿内間取図」(部分 明治17年4月頃)

に「拾五間二分五厘」と、実施案より広く記されており、御車寄受付之間の北側壁面も明治17年11月の木子文庫所収図面²²⁾には「中マトカラスセウシ」が計画されるなど、アプローチ空間から望む外観の記念性についても、実施案ほどは強調されていないことがわかる。一方、饗宴空間の溜之間については、当初は謁見所の周りに多く計画されていたものが、設計変更によって次第に饗宴所前の中庭に移動して行く様子を知ることができる。例えば、宮内庁所蔵『皇居御造営誌編纂下調図』

などを見ると、明治16年10月頃には東西溜之間が謁見所前の中庭に面して配置され²³⁾、饗宴所前の中庭には溜之間らしきものが設けられていないが、明治16年12月の床面積拡大後には、より広い東西溜之間が饗宴所前の中庭に設けられたことがわかる。また明治17年4月頃に謁見所の東西両隣に設けられていた「謁見所東西之間」は、その後の設計変更で廃止され、実施案に至る過程では、明治17年4月頃には計画されていなかった南北溜之間が饗宴所東側に新設された。

こうした特徴は、いずれも明治宮殿に想定された近代的な儀礼形式に配慮したものであったと考えられる。すなわち、御車寄南側への空地の確保は大規模儀礼の際に「車馬」が集中することを想定したものであり、饗宴空間への溜之間の増設も同様に大規模な饗宴を想定したものであったと見ることができる。そして、謁見所と御車寄の外観構成によってアプローチ空間に表現された「記念性」は、近代の天皇に求められた「権力」の視覚化²⁴⁾を正門から参内する者に対し最も目立つ形で表現したものであったと考えられる。宮中儀礼の中心施設である謁見所と饗宴所を儀礼空間の中心に据え、中庭を共有する他の建物とも効果的に関係づけたこの平面形式は、記念性の表現や大規模儀礼への対応といった「近代の宮殿」への要求に対し、規模に限界のある木造建物でも対応可能な手法として適用されたと考えられる。

4. 儀礼空間の室内意匠に表現された「近代の宮殿」のイメージ

儀礼空間の室内意匠については、表1を見る限り、洋風の壁面意匠、華麗な装飾天井などによって、ほぼ同じ仕様で統一されたと考えられる。しかし、個々の建物に用いられた装飾モチーフや色彩については『皇居御造営誌』の仕様書から多様であることが知られ、また『皇居御造営内部諸装飾明細図』に収録された天井張付、建具の原色縮図や緞帳・張付織物のサンプルからは、そうしたモチーフや色彩の違いが、宮殿の意匠表現において極めて重要な役割を担っていた様子を窺うことができる。そこで本章では、これらの史料を用いて儀礼空間の室内装飾について詳細に検討し、その用い方に見られる特徴とその意匠表現の意図について考察した。

まず、儀礼空間の壁面と天井に用いられた装飾について、『皇居御造営誌』の仕様書に記載された素材、技法、色彩、模様を表2にまとめた。表2を見ると、模様のモチーフと色彩の選び方において、謁見所には饗宴所以下の建物と異なる特徴が見られ、壁面の模様には、「龍」、「獅子」、「鳳凰」などのいわゆる「瑞鳥盡獸」モチーフが用いられ、色彩には主として張付織物・緞帳の「紫赤色」、腰壁の「堆朱塗」などの赤²⁵⁾や、天井格縁や造作材、建具など木部漆塗りに「黒蟬色」が用いられたことがわかる。木部の漆塗りについては『工程表』から、一旦すべての主要建物が謁見所と同様に「黒蟬色」で塗装された(明治20年1月～6月)後、「饗宴所格天井縁紅ウルミ塗仕増」(明治20年7月23日～8月6日)の際に、謁見所以外の主要建物がウル

表2. 儀礼空間の室内装飾に見られる特徴(『皇居御造営誌』および『皇居御造営内部諸装飾明細図』を用いて作成)

	壁張付			緞帳			腰羽目		天井		
	素材	色	模様 間内/小壁	素材	色	模様	技法	模様 建具腰板/腰壁	仕様・形式	模様 平部分	木部塗装
謁見所	襦子張	紫赤色	正倉院龍紋/獅子唐草	襦子地	紫赤色	鳳凰唐草	堆朱塗	舞鳳凰/宝花	漆塗二重折上格天井極彩色張付	宝相花	黒蟬色
饗宴所	緞子張	暗茶色	桐蜀紅/鳴鉄仙唐草	ハズリ	藍鼠色	花鳥	金白種塗	高野鉄仙/手向山鉄仙	漆塗二重折上格天井極彩色張付	古紋小牡丹	ウルミ色
後席之間/広間	襦子張	鶯茶色	牡丹唐草/蝶鳥	畔地織	鶯茶色	薔薇	襦子地	苑二竹/果物野菜類	漆塗折上格天井極彩色張付	千草模様	ウルミ色
婦人之間	襦子張	光色	薔薇/薔薇	アワ織	薄錆白茶色	秋草	襦子地	苑二竹/果物野菜類	漆塗折上格天井極彩色張付	牡丹	ウルミ色
小食所	襦子張	紫檀色	正倉院/葡萄	アワ織	紫檀色	正倉院	襦子地	苑二竹/果物野菜類	漆塗折上格天井極彩色張付	花雀	ウルミ色
東溜之間	緞子張	金茶色	板蜀紅	襦子地	紺色	鳳凰唐草	銀杏木地	香草文	漆塗折上格天井極彩色張付	八重唐花菱	ウルミ色
西溜之間	緞子張	錆時紅色	七宝蜀紅	アワ織	錆浅黄色	貝尽	存星	梅丸	漆塗折上格天井極彩色張付	瑞雲宝花	ウルミ色
南溜之間	緞子張	海老茶色	花紋		なし			なし	漆塗折上格天井極彩色張付	古紋菱花菱	黒蟬色

ミ色に塗り直されたことが知られ、このことにも謁見所を意図的に他の主要建物と区別しようとする姿勢が見られる。装飾モチーフに用いられた「瑞鳥霊獣」は、天皇の権威を示すために用いられたと考えられ、また赤や黒といった色彩も、天井張付の金箔や緞帳・玉座に多用された金糸とともに格の高さを示す色彩と考えられることから、謁見所の室内装飾では、主に天皇の「権威」が表現されたと考えられる。

一方、饗宴所とその中庭を共有する後席之間、東西溜之間、南溜之間については、モチーフや色彩の用い方に共通点と多様性が見られる。モチーフの用い方について表2を見ると、これらの建物には共通のモチーフとして「花鳥」が選択され、その中で個々の建物ごとに異なる題材が適用されたと考えられる。「花鳥」を共通のモチーフとする姿勢は竣工後に行われた建物の改称（明治21年12月27日）にも見られ、後席之間が「千種の間」（広間）、「牡丹之間」（婦人之間）、「竹之間」（小食所）へと改称された際には、東西溜之間は「杜鵑（ほととぎす）ノ間」（東溜之間）、「山鵲（かささぎ）ノ間」（西溜之間）へ、南溜之間は「花鳥ノ間」へと改称することが検討²⁶⁾された。また建物ごとに変化を付ける手法は色彩の用い方にも見られ、表2からは、張付織物・緞帳の色彩も建物ごとに変えられたことが知られ、また木部の塗装に用いられたウルミ色についても、『皇居御造営内部諸装飾明細図』所収の建具の縮小絵図を見る限り、ウルミ色の明るさや色の調子が建物ごとに変えられていた様子が窺える。このように、饗宴所とその中庭を共有する建物では、中庭を囲む饗宴空間全体で「華やかさ」を醸し出すように室内装飾が用いられたと考えられる。

饗宴空間全体で「華やかさ」を演出しようとする姿勢は、饗宴所前の中庭の扱いにも見ることができる。中庭の竣工時の様子について『皇居御造営誌・御庭作事業』所収「豊明殿前御庭作絵図」（図6）を見ると、中央には「古銅水盤」²⁷⁾を用いた噴水が据えられ、饗宴所、後席之間、東西溜之間から中央の噴水へは、それぞれに苑路が設けられた他、『皇居造営録』所収「饗宴所中庭御庭作入費之件伺」²⁸⁾から、樹種には花の咲く木（ツツジ、サクラ、ウメ、サルスベリ、モクレン、モクセイ）や紅葉する木（サクラ、カエデ）など、四季の変化を楽しむものが多く植えられていたことが知られる。このように、饗宴空間の中庭は建物内部からの眺望とともに、散策することも想定して設計されており、視覚的にも実際の利用形態においてもこの中庭にはこ

図6.「豊明殿前御庭作絵図」（『皇居御造営誌・御庭作事業』所収、宮内庁所蔵）

れらの建物を結びつける役割が期待されたと考えられる。

以上のように、儀礼空間の室内意匠では装飾モチーフと色彩を使い分けることで謁見所には「権威」が、饗宴所とその中庭を共有する建物には「華やかさ」が表現されたが、謁見所に独立性を与え、饗宴所を中庭を共有する建物と一体的に扱う手法は、前章で見た平面計画と共通のものであることから、こうした儀礼空間の室内意匠は、平面計画の設計意図を踏襲する形で天皇の「権威」や大規模な饗宴にふさわしい華やかなイメージを表現したものであったと見ることができる。

儀礼空間の室内装飾に見られる特徴としては、こうしたモチーフや色彩の用い方の他に、ほぼすべての装飾が「文様」によってデザインされた点も挙げられる。『皇居御造営誌』にはこれら室内装飾に用いられた文様について注記が書き添えられており、例えば謁見所の天井模様（二重平）については、「意匠東大寺経函繪紋」と記されている。古代宝物が装飾模様の参考にされたことについては、『明治工業史建築篇』第五編第一章第一節「宮城表宮殿の装飾」で詳しく紹介されており、また多くの先行研究でも触れられてきたが、ここでは引用元の宝物を特定するとともに、それらがどのような経緯を経て引用されたかにも注目することで、そのデザインの意図について考察した。

まず、『皇居御造営誌』記載の注記と『皇居御造営内部諸装飾明細図』に収録された縮小絵図・サンプルを手掛かりに、これら装飾模様の引用元を調べたところ、少なくとも図7～10に示した4件については、表3に示した引用元と考えられる正倉院宝物や平家納経などの宝物文様と極めて良く似たデザインであることが確認できた。このこ

図7.謁見所天井張付文様

図8.謁見所壁張付織物文様

図9.饗宴所天井張付文様

図10.東西脱帽所ほか壁張付織物文様

図7-10. 儀礼空間の装飾文様（『皇居御造営内部諸装飾明細図』所収）

表3. 儀礼空間の装飾文様とその引用元と考えられる宝物

	建物（部位）	注記『皇居御造営誌』	引用元と考えられる宝物
図7	謁見所・天井 （二重平）	「東大寺経函繪紋」	正倉院宝物 「密陀彩絵箱」
図8	謁見所・壁張付 （間内）	「正倉院龍紋」	正倉院宝物 「双龍唐草円紋縁綾」
図9	饗宴所・天井 （二重平・円紋）	「政子手函浮線綾紋」	サントリー美術館所蔵 「浮線綾螺鈿時絵手箱」
	饗宴所・天井 （二重平・地紋）	なし	平家納経「人記品」表紙 「亀甲花菱紋」
図10	東西脱帽所ほか壁張付 （間内）	「宝花」	正倉院宝物 「紫地唐花文錦」

とは、これら文様のデザインに際して、実物か実物に関する詳しい史料が何らかの形で参照されたことを示すと考えられるが、『皇居造営録・日誌』に、「厳島神社蔵模本八巻豫而山高博物館長心得承知ニテ本局ニ当■有之候処」(明治19年7月8日、■は不明)や「東大寺所傳古裂写一冊昨十八年五月以来杉局長図書寮以借用之処」(明治19年12月2日)などの記述が見られることから、これら宝物文様の引用に際しては、博物館所蔵の平家納経の模写本や宮内省図書寮所蔵の正倉院宝物の模写本などが参照された可能性が高いと見られる。

儀礼空間の室内装飾に正倉院宝物など古代宝物の文様を引用した理由について、『皇居御造営誌・絵画』には「古今内外文質雅致透逸ノ参照ヲ廣遠ニ求メ参考書籍画譜古錦繡名勝地ノ巨刹寺院ノ遺蹟ニ存在セル画趣ノ妙味ヲ交照ニ取り各専門家ノ匠意ヲモ容採シ官私所蔵什器ヲ借用スル」と記されており、少なくとも威圧的なものよりは雅やかなモチーフを好んで選択した様子が窺える。なお、近世書院造の遺構において、正倉院宝物や平家納経など著名な古代宝物の文様をそのまま格天井の文様に使用した事例は知られていない²⁹⁾ことから、こうした宝物文様を直接的に引用する装飾手法は、近代的な伝統表現の手法として新たに創出されたものであったと考えられる。

ところで、『皇居造営録』には明治17年以降に御造営事務局が蒐集した絵画資料の記録が残されており、伝統表現の方法がさまざまに検討された様子を知ることができる。これを見ると、明治17年には「日本丸張付絵様式百貳拾四卷」³⁰⁾や「京都御所安政度御造営間内御襖張付等之絵様雛形」³¹⁾など主に障壁画の下絵が蒐集されたのに対し、明治19年には「丹鶴図譜」や「集古十種」など伝統的な宝物の模写本が数多く蒐集され³²⁾、また日光東照宮の文様調査³³⁾も実施されるなど、意匠的な関心が文様へと変化した様子が窺える。『皇居御造営誌』には、「総テ繪画或ハ彩色等ニ係ル事ハ博物館長山高信離専ラ之ヲ指揮セリ」³⁴⁾や「其花紋ノ意匠ハ博物館長山高信離ノ考案ニ出」³⁵⁾と、装飾文様が明治18年6月8日に囑託として宮殿の造営に参加した山高信離によってデザインされたと記されていることから、蒐集資料の内容の変化も山高の意向であった可能性が高い。また山高信離は、明治10年代を通じて農商務省博物局で各種の宝物調査や伝統工芸品の改良事業に関与していたことが知られているが³⁶⁾、こうした宝物文様の引用には、山高が明治10年代の美術行政を通じて培った伝統美術に関する見識や人脈が反映していることも考えられる³⁷⁾。

5. 装飾品の生産に活用された近代技術

前章では、儀礼空間の室内意匠において、建物ごとに色彩やデザインに変化が付けられ、またその模様には古代宝物の文様が精緻に引用されていたことを述べたが、こうした手法を実践するには、大空間の壁や天井を覆い尽くす大量な装飾品を、竣工に間に合うように短期間で生産できる技術的な裏付けが不可欠であったと考えられる。本章では、これら儀礼空間の室内意匠に用いられた装飾品の生産過程について検討を加え、その生産体制には明治20年頃の日本における最新の技術が積極的に活用されていたことを述べる。

まず、天井張付の模様紙については、『皇居御造営誌』に「各宮殿折上天井格間嵌込装飾ニ用ユル大鷹翼華紋打出紙及ヒ各所廊下ノ壁張ニ要スル花紋紙等ノ製作方ヲ印刷局ニ囑托ス」³⁸⁾とあり、『印刷局沿革録』³⁹⁾にも「是年(筆者註・明治19年)皇居御造営用壁紙ヲ製造ス」とあることから、模様紙は大蔵省印刷局の「打出」印刷によって

製作されたと見てほぼ間違いのない。当時の印刷局では、ドイツから購入した壁紙製造機を用いて輸出品の金唐革紙を盛んに製造していたことが知られており⁴⁰⁾、この模様紙の「打出」印刷にも金唐革紙の製作技術が活用された可能性が高いと見られる⁴¹⁾。一方、模様紙の彩色については、『皇居御造営誌・絵画』所収「格天井打出模様紙彩色」に、東西脱帽所を除くほとんどの建物の彩色を「小池有終」なる人物が請け負ったことが記されているが、この人物については、『皇居造営録』所収「御請書」⁴²⁾から「精工社」の代理人であったことが確認できる。「精工社」については、明治初期に美術工芸品の製作・改良・技術伝習などに活躍した民間の勤工場附属工場であったことが知られており⁴³⁾、このことから、天井模様の彩色は「精工社」の工場生産体制を利用して大量に製作された可能性が高いと考えられる。

鍍金物のメッキについては、『皇居御造営誌』の記録から、奥宮殿の建物や御学問所には水銀鍍金や「墨指」など伝統的な技法が用いられたのに対し、儀礼空間の建物には「電気鍍金」が用いられたことがわかる。鍍金物の電気鍍金がどこで施されたかは不明であるが、電気鍍金が一般に普及したのは明治27年の日清戦争以降とされている⁴⁴⁾ことから、明治宮殿の事例は極めて初期のものと考えて良い。

壁張付や緞帳に使用された織物については、『皇居御造営誌・家具事業』の「欧州製ニ模擬シタル錦繡綾羅ヲ織ラシム」との記述から、洋風の織り方が取り入れられたことが知られ、また『皇居御造営誌・織物事業』には、「仏國製ジャカル製メカニク三百本ノロヲ用ユ」と、文様織物に強いジャカル織機を使用したことが記されている。ジャカル織機による文様織りは糸の先染めを必要とするが、この織糸の染色については『皇居御造営誌・織物事業』所収の仕様書に、「赤アリザリン染」や「黒ログウッド染」と記されていることから、当時フランスで開発されて間もない合成染料(アリザリン染め、ログウッド染め)が使用されたと考えられる。合成染料を採用した意図については、皇居御造営事務局が織物担当の荒川新一郎に電報⁴⁵⁾で「日本染ハ色変ル如何計ラウテ能キカ」(明治20年6月27日)と、伝統的な染色技術に対する不安を示しており、おそらく洋風の壁張付織物や緞帳に求められた華麗な色彩、発色の明快さ、色彩の多様性、色褪せの防止などを期待して合成染料を採用したものと考えられる。そして、「色染ハ彼是手ヲ尽シ稲畑ノ法ニ依リ殆ド望通ニ染ル積リ」(明治20年6月29日)との電報があることから、染色の技術指導は、リヨンへの留学経験を持ち、当時京都府織殿御用掛で染色技術の近代化に努めていた稲畑勝太郎⁴⁶⁾によって行われたと考えられる。

以上のように、儀礼空間の装飾には近代的な生産体制が積極的に活用された。儀礼空間の建物に見られる大空間には、トラスや煉瓦基礎などの洋風技術が適用されたことが知られているが、そうした構造技術とともに、壮麗な室内装飾もまた当時の日本の最新技術を用いて初めて可能になったものであったといえる。すなわち、儀礼空間の壮麗な室内意匠は、デザインと生産技術の両面において近代化を積極的に取り入れた、新しい形の意匠表現であったと見ることができる。

6. 結論

本稿では、宮内庁所蔵史料や木子文庫所蔵史料を用いて、明治宮殿の表宮殿に見られる意匠の特徴を平面計画と併せて検討し、その特徴が「近代の宮殿」に対する要求とどのように関係づけられたかに注目して考察することで、以下のことを明らかにした。

明治宮殿の建設された西之丸・山里の敷地は高低差が最大で20尺以上もあったが、造営過程では「武重石垣」が新設され、敷地は高さの異なる3つの領域に区画された。西之丸はこれにより「中段」と「下段」に分割され、平面計画ではこの高低差を利用する形で「中段」=日常政務の場、「下段」=宮中儀礼の場という形にゾーニングされた。表宮殿ではこの平面計画のゾーニングを踏襲するように室内意匠が用いられたと考えられ、和風色の強い「中段」に対して「下段」の儀礼空間に限っては壁面の洋風意匠や壮麗な天井意匠が適用された。

儀礼空間の平面計画を詳細に検討すると、宮中儀礼の中心施設である謁見所と饗宴所では、中庭を共有する建物との配置関係に異なる特徴が見られた。謁見所は単体で「権威」を表現しつつ、謁見所の大屋根と正面の左右相称の東西脱帽所の屋根による三部構成によって御車寄前のアプローチ空間に「記念性」を表現したのに対し、饗宴所前の中庭には、大規模儀礼の際に必要なとされる溜之間が集中的に配置された。これは、それぞれ「近代の宮殿」に要求された「権威」の表現や大規模な儀礼に木造建物に可能な手法で対応したものと考えられる。

儀礼空間の室内意匠では、室内装飾の色彩と装飾モチーフの用い方において、平面計画と同様に謁見所には独立性が与えられ、饗宴所以下の建物は一体として扱われた。すなわち、謁見所では瑞鳥霊獣のモチーフと赤・黒などの色彩によって「権威」が表現され、饗宴所と中庭を共有する建物では花鳥モチーフとその中での多様な意匠や色彩、そして中庭によって「華やかさ」が表現された。

室内装飾に用いられた文様には、博物館所蔵の正倉院宝物や平家納経などの古代宝物文様の模写本などが参照され、ほぼ正確に引用されたと考えられる。宝物文様の引用は、威圧的なものよりも雅やかな意匠が好んで選択されたが、こうした手法は、近世には見られない近代的な伝統表現の手法として適用されたと考えられる。模様のデザインには山高信離が中心的役割を果たしたが、そこでは山高が明治10年代の美術行政で培った見識・経験・人脈が活用されたと考えられる。

これら装飾品の生産体制には、大蔵省の印刷技術、「精工社」、電気鍍金、ジャカル織機、合成染料など、当時の日本の最新技術が積極的に活用された。このように、儀礼空間の壮麗な室内意匠は、「近代の宮殿」に対する複雑な要求に配慮し、かつ「近代化」を積極的に取り入れて創出された、新しい形の意匠表現であったと考えられる。

〔謝辞〕 本稿を作成するに当たり、宮内庁書陵部（当時）の小坂敏郎氏には史料閲覧に関してお世話になりました。記して謝意を表します。
〔注〕

- 明治宮殿を扱った通史としては、桐敷真次郎『明治の建築』（日経新書、昭和41年、pp.95-98）、村松貞次郎・近江栄編『近代和風建築』（鹿島出版会、昭和63年、pp.114-117）がある。表宮殿の内部装飾に関する個別研究としては、桐敷真次郎『宮殿建築の「種」—明治宮殿の室内装飾と二代川島甚兵衛—』（『KAWASHIMA』12号、昭和58年9月）がある。
- 同書では、内部意匠について「奥宮殿の諸殿舎は、書院造の性格の強い、かつ和風を主体とする建物であった。これに対して、表宮殿の諸殿舎は、紫宸殿なども参考にされ、外観をはじめ、主体部は和風を継承するものであったが、外交上洋式儀礼を導入しなければならなかった時代の特性を反映して、建築とくにその構造面や内部装飾において洋式が顕著に導入されていることがわかる」（p.18）とある。
- 『皇居御造営誌・巻之四』明治14年11月24日条
- 江戸城西ノ丸の図面には、元治度「江戸城西丸仮御殿総地絵図」（『城郭・侍屋敷古図集成・江戸城1<城郭>』至文堂、平成4年、pp.76-77）を用いた。
- 『皇居造営録・石垣（山里）』所収「山里御敷地々違イ石垣地形根切堀割ヨリ該土引均方仕様書」（明治17年4月）
- 『皇居造営録・石垣（山里）』所収「山里御敷地々違武重石垣築造入費概算積書」（明治17年4月）
- 『皇居造営録・石垣（山里）』第1巻所収、山里石垣配置図（無題）
- 木子文庫所収「第貳区御建物床達色分之図」（床高さ比較図、史料番号・木111-3-007：明治18年4月8日）、石垣の造成は明治17年末に終了してお

- り、この図が最終的な状態を示していると考えられる。
- 『皇居御造営誌編纂下調図』所収「謁見所以下地之間図」（表宮殿、日付なし）「常御殿以下四百分一」（奥宮殿、明治18年8月調）を用いて作成した。これらは内容から最終図面と考えられ、竣工時に最も近いと考えられる。
- 木子文庫所収・御学問所建具図（木092-4-010、明治19年2月28日）
- 『皇居造営録・御学問所』所収、明治20年5月
- 『皇居造営録・内謁見所』所収、明治20年6月
- 『建築雑誌』第25号「宮城地絵図」附図参照、明治22年1月
- 『皇居御造営誌・巻之四』明治14年11月24日条（山里正殿に関する記述）
- メアリー・フレイザー著・横山俊夫訳『英国公使夫人の見た明治日本』（淡交社、昭和63年）には、明治23年の新年拝賀について「皇居の車寄に達するには長いまわり道をしなければなりません。そして内庭にはすでに数多くの馬車が到着していましたので、私たちは遅れたのではないかと心配になるほどでした」（p.136）と記されている。
- 『皇居御造営誌・石橋架設事業』所収「大手石橋新築仕様書」に「車道巾縁石内貳拾尺」とあり、同様に『皇居御造営誌・鉄橋架設事業』所収「鉄橋架設仕様書」に「車道槻寄セ木張巾貳拾尺」と記されている（附図あり）。
- 『皇居御造営誌・鉄橋架設事業』所収「二重橋構造明細書翻訳」（明治19年10月2日）
- 図1（註8参照）より、儀礼空間の床高は謁見所を基準に、饗宴所と後席の間は0.76尺、東西溜之間は1.5尺、御車寄受付之間2.14尺それぞれ低い。また庭に面した階段の段数は、謁見所が8段、饗宴所・後席之間が7段、東西溜之間が6段となっている。
- 『皇居御造営誌』記載の柱間寸法から算出した（1間=6.5尺換算）。
- 木子文庫所収・床高さ比較図（木109-1-018、明治17年2月21日）
- 宮内庁書陵部所蔵、日付はないが『皇居御造営誌編纂下調図』第88号図面（明治17年7月14日）と平面がほぼ一致することから判断した。
- 木子文庫所収・御車寄平面図（木102-1-066、明治18年1月14日）
- 謁見所前庭の東西に位置する建物（実施案の東西脱帽所の位置）について、木子文庫所収「第貳区御建物家根植分図」（木123-1-031、明治16年10月頃）には「溜之間」と記入されている。
- 明治初期の「天皇の視覚化」をめぐる一連の動きについては、多木浩二『天皇の肖像』（岩波新書、昭和63年）に詳しい。
- 謁見所の玉座天蓋にも「赤天鷲紋」の裂地が用いられている。（『皇居御造営誌・家具事業』所収「家具及敷物約定書附属書」より）
- 『恒例儀式録』所収「孝明天皇御例祭二付舎人配役」（明治22年1月30日）には、東溜之間が「櫻ノ間」、西溜之間が「紅葉ノ間」、南溜之間が「柳ノ間」、北溜之間が「桃ノ間」と記されている。
- 『皇居造営録・庭園』所収「饗宴所中庭へ古銅水盤据付台石水管井二泉水仕掛仕様」（明治20年6月14日）に「右ハ延遠館庭前二据付有之処取崩シ饗宴所中庭迄不損様■生運送致シ」とあることから、噴水頂部の古銅水盤は芝の延遠館から移設したものと考えられる。
- 『皇居造営録・庭園』所収「饗宴所中庭庭作入費之件伺」（明治20年5月26日）、中島卯三郎『皇城』（雄山閣、昭和34年）p.160の記述も同じ。
- 宮城学院女子大学学芸部教授・後藤久太郎博士の御教示による。
- 『皇居造営録・絵画』所収、明治17年10月20日
- 『皇居造営録・絵画』所収、明治17年6月10日
- 『皇居造営録・雑品』所収「花鳥図式其他買入方之義伺」（明治19年8月29日）および「図書購買方伺」（明治19年12月28日）他多数
- 『皇居御造営誌・巻之七』明治19年7月11日条、『皇居造営録・絵画』には「右者日光山寺建物之紋様参考ノ為着色模写致シ置度」（下線部筆者、明治19年8月22日）とある。
- 『皇居御造営誌・家具事業』第1巻
- 『皇居御造営誌・巻之七』明治20年2月9日条
- 山高信離（1840～1907）の経歴については、関千代「皇居杉戸絵について」（『明治宮殿の杉戸絵』博物館明治村、平成3年）などを参考にした。
- 例えば、平家納経の模写事業については小松茂美『平家納経の研究（下）』（講談社、昭和51年）に詳しく、これによると模写は山高信離の指導の下に明治16年5月～17年5月に農商務省博物館で行われ、画工には長門晏春、前田貞業、（遠藤）貫周など、後に皇居造営に関わる者が多く携わっている。
- 『皇居御造営誌・巻之八』明治20年2月9日条
- 『印刷局沿革録』（印刷局、明治40年）p.126、「お札と切手の博物館」所蔵
- 久米康生「明治の“芸術産業”金唐草紙」（『きんからかわ・革と紙の東西交流』INA BOOKLET、昭和55年）、P.57
- 「お札と切手の博物館」には、明治宮殿の壁紙として伝わる金唐草紙製の壁紙が保存されている。
- 『皇居造営録・絵画』所収、「御請書」（明治20年4月27日）
- 『明治デザインの誕生—調査研究報告書「温知図録」—』（東京国立博物館編、平成9年）によれば、精工社は明治11年に設立され、明治20年には男子工員350名を抱えている。（同書「人名注解」p.51より要約）
- 『東京都鍍金工業組合八十年史』（東京都鍍金工業組合、昭和46年）に、「明治20年ごろから宮川電鍍が電気メッキ法を採用して企業を起し（中略）電気メッキの工場生産体制が整って、採算ベースに乗ってきたのは27年前後の日清戦争による、メッキされた金属加工品が大量に受注されるようになってきたからであろう」（p.35）と記されている。
- 『皇居造営録・雑品』第41巻所収
- 稲畑勝太郎（1862～1949）は、明治19年7月20日に「皇居御造営装飾用織物染色取調」を依頼されている。（『皇居造営録・雑品』第22巻所収）

（2003年10月10日原稿受理、2003年12月22日採用決定）